



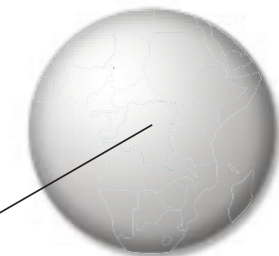
ゴンベ学院で実施した司法警察研修に参加した筆者(左)、日本の警察制度を紹介し、講師も交えて同国での適用性について議論した

FIELD SKETCH

警察民主化研修の現場が示す親しまれる援助

周辺国を巻き込みアフリカ最悪といわれた紛争が2002年に終結し、平和の定着、国家再建に向けて歩み出したコンゴ民主共和国。06年7月に独立後初の民主的な大統領選挙、国民議会選挙が実施された。JICAは、同国の治安が安定し、こうした選挙が平穩に行われるよう、警察民主化研修を支援している。民主的な国づくりを担う警察官を育成する研修の模様を紹介する。

文・写真 = 北原 直美 (元JICA南アフリカ事務所企画調査員、国連開発計画[UNDP]モザンビーク事務所次長)
text and photos by Kitahara Naomi



コンゴ民主共和国
Democratic Republic of the Congo

炎天下で行われた秩序維持・デモ管理研修の模様。体調不良や熱射病で倒れる参加者が毎回出るため、JICAから看護師と薬や飲料水を用意した

「恐怖からの自由」のために

「ディディ、ディディキノアニー」。コンゴ民主共和国(以下、コンゴ民)の現地語(リンガラ語)で「人々を困難から救ってくれる人」を意味する言葉である。それが、首都キンシャサ市では「JICA」を示唆して使われ始めている。

1998年から2002年にかけて、近隣諸国をも巻き込んだ「アフリカ大戦」の原点となり、約400万人が死亡したとされるコンゴ民。02年に和平協定が合意され、06年にはベルギーからの独立後初の民主選

挙が行われ、「平和の定着」に向けて歩き出している。しかし、貧困レベルは依然として最悪の状態だ。主に病気や医療サービス不足などから一日1200人が命を落としていると推定され、「アフリカの津波」と呼ばれる人道危機に陥っている。

そのコンゴ民でJICAは民主選挙支援の一環として警察民主化研修を実施している。内紛が長年続いた同国において初の民主選挙が行われることを国際社会は強く期待し、選挙支援として前代未聞の規模である約5億ドルが投入されている。その選挙を成功させるためには、警察能力の向上によって人々が「恐怖からの自由」を手にし、

安心して投票所に出向き一票を投じる環境を確保することが必須だ。つまり、警察がモブツ政権時代のように独裁政治の先手として機能するのではなく、人々を守るという、民主的役割を果たすことを意味する。



との連携で行われた研修を受けたキンシャサ州警察官89人が、以後の研修講師陣として活躍している。その中には民主選挙直前のデモなどで負傷または死亡した者もあり、現在は84人が研修を行っている。これまで研修を受けた警察官は、05年度の4722人(キンシャサ州警察)に加え、06年3月に995人(キンシャサ州警察)、6~7月に1226人(内1000人がキンシャサ州警察、126人がバ・コンゴ州マタディ警察)と計約7000人に上る。07年度上半期にはさらに約2500人の研修が予定されており、合計で約1万人の警察官をJICAが訓練することとなる。

参加者の選抜は、最大限の効果を得るために非常に慎重に行ってきた。過去にMONUCが実施した研修で成績が優秀と見なされた者から選抜し、次第に下層部の警察官を対象とすることでトリックル・ダウン効果を図った。また、ジェンダーのバランスを取ることを重視し、コンゴ民警察とMONUCの協力を得て、できるだけ多くの女性警察官を受け入れた。そのためか研修の質疑応答時には「日本ではどのようにして女性警察官の数を増やしているのか」「日本の女性警察官の特別な役割は何か」といった質問も活発に飛び交った。

日本の経験を生かして

研修は、秩序維持研修（警察デモ隊を対象とした民主的なデモ管理、パトロール方法、護衛、避難方法など）、司法警察研修（上級警察官が対象で、人権法、刑事法などさまざまな法律）、情報警察研修（捜査業務の詳細が中心で私服警察などが対象）、警察民主化再研修（主に下層部の警察が対象で、警察の基本的な役割などの再研修）の4コースに分かれる。研修時には日本の警察制度、特に治安を向上させるために世界中に普及しつつある交番制度を紹介し、日本の警察官がいかにかの町の人々とかわり合いながら業務を遂行してい



ゴンベ学院での私服警察を対象とした情報警察研修。JICAの研修を受けたコンゴ民警察講師とMONUC講師によって行われた

るかについて説明。また、日本も戦争を経験し、戦後、廃虚の中から立ち上がり現在の経済発展がある、というメッセージを伝えるとともに、コンゴ民も平和を構築し、民主化と国の発展を促すためには民主警察の存在が肝心であると強調した。

研修場所には主にキンシャサ市内のゴンベ学院（小中学校）を休校期間中に利用した。「ここはもう使用されていないのでは」と思うほど、窓ガラスは割れ、ドアもがたがたに崩れ、電気が使える教室もほとんどない、廃虚のような校舎だ。しかし、実際に子どもたちが通う学校であり、警察研修のように何百人も一度に収容できる施設はゴンベ学院以外にはない。屋根もまともでないオープンスペースを借りて、壊れかけた机といすを運んだこともあった。最適な環境とは言い難いが、真剣なまなざしでノートを取る参加者の姿が常にあった。

親しまれる「ジカ」の支援

回国でこの警察研修の評判はとても高く、参加を希望する警察官が非常に多い。研修を通じて、「民主警察」の役割を理解し、自分たちの能力を向上したいという思いが強いかもしれない。あるいは、内政不安から教育シ

ステムはほとんど機能しておらず、学校に行きたくても行けない、資格を取りたくても取れないといった状態が長年続いたため、研修を受けて自己の成長やキャリアアップにつなげたいというハングリー精神もあるのかも知れない。

そのためか、研修最終日に、コンゴ民内務

省、JICA、MONUCのロゴとサインが入った研修修了書を授与された警察官たちの表情は喜びに満ちあふれている。修了書は、「紙切れ一枚」ではあるが、警察官としての自覚と誇りを高める効果を持つ。これは、ほんの数年前まで戦闘を繰り返していた旧兵同士が警察官となり、国の民主化に貢献する第一



キンシャサ州警察庁にて3,000人を集めて実施された警察民主化研修修了式にはMONUC/バングラデシュ警察（上）やMONUCインド警察も出席。MONUCインド警察は空手の演武を披露した（下）

キンシャサ警察民主化研修修了式での行進の様。自信を持って誇らしげに歩く警察官たち



歩を踏み出したことをも意味している。修了式開催が数日遅れるといったトラブルがあったときは、キンシャサ市内でJICAスタッフがを見かけると、「ジカ（JICA）のフランス語読み」いつ修了書がもらえるんだ」とせがすほどだった。

デモ管理研修の演習など研修の種類によっては、何時間も炎天下で行われることもある。

その時は体調不良や熱射病で倒れてしまう参加者が毎回出るため、JICAが看護師と薬や飲料水を用意して対応している。こうしたハードな研修でも一日が終わるころには、かつては敵対関係にあったであろう者同士が、肩を組み、満足げに帰途につく。「自分たちはジカが大好きだ」と楽しそうに歌いながら。

私は、この警察民主化研修の経験によって、日本の国際協力が地に足の着いた形で、確実に「ひと」に届いていることを実感した。また、援助の形態がまったく異なるJICAと国連が協力することの有効性、まさにパリ宣言の「現場化」がなす意味の重要性を知った。

キンシャサの町を歩いた時、「ジカ」「ジカ」と親しげに話し掛けてくる警察官からは「もっと、もっと研修を受けて能力を高めたい」という意気込みが強く伝わってきた。日本の援助がコンゴ民の「ひと」にとても親しまれていることを肌で感じる経験であった。

国連ミレニアム開発目標など世界共通の開発目標の達成に向けて、援助の質を高めて援助効果を向上するために、必要な措置についてドナーとパートナー国（被援助国）双方の約束事項を取りまとめたもの。被援助国のオーナーシップ（自主性・主体性）、被援助国の政策・制度に整合した事業の実施（アライメント）、ドナーの調和化などが挙げられている。2005年3月の「パリ援助効果向上ハイレベルフォーラム」で採択された。

FIELD SKETCH